

分類学者C・リンネが「ホモ・サピエンス」（知恵あるヒト）と命名した人類は、二〇万年前に誕生した我々現代人の直接の祖先である新人を指す。それ以前の旧人、すなわちネアンデルタールと区別して分類する目的もあった。

これに対して「ホモ・モビリティス」（移動するヒト）は、七〇〇万年前にアフリカで誕生した猿人以降の人類すべてを含む。人類がその誕生以来、汎地球規模に移動して生活を続けたことを、端的に表現したのがこの呼称である。自然人類学者・片山一道（京大名誉教授）が提唱した。

地球上の動物のうち、ひとつの種がこれほど広い分布範囲をもち、異なる生態環境を克服して生息しているのは人類しかない。アフリカで誕生して以来、森林から草原へ進出することで二足歩行を始め、アフリカからユーラシアへと移動することを繰り返しながら、人類は徐々にその分布範囲を広げてきた。ホモ・サピエンスが誕生してからは、ユーラシア大陸ばかりか、南北アメリカ大陸、オーストラリア、そして、海を渡ってオセアニアの島嶼部にまで移動していったのである。

なぜ人類は移動したのか、そのもっとも重要な原因のひとつに気候変動が考えられる。温暖期に緯度の高い地域にまで移動しても、寒冷期には暖かい地域に後退することを繰り返したのはネアンデルタールだった。それに対して、寒冷環境にも適応してさらに先へと移動したのがホモ・サピエンスである。

ホモ・モビリティス

Homo Mobilitas

印東 道子 いんとう みちこ 民博 民族社会研究部

このネタいただき!

人間学の キーワード

彼らは、気候変動から逃げるのではなく、道具や衣類を工夫することで、寒冷環境へも進出していった。脳容量が大きくなったことも、このような工夫を生み出す背景にあった。

同じように、人類はユーラシア大陸の大半の哺乳類が越えることのないバリ島の東をとおりウォーレス線を越えて海洋地域へと移動していった。島伝いにアジアからオーストラリアへと海を越えたのは今から約四万五千年前のことで、アメリカ大陸に人類が移動した二万数千年前よりもはるか昔のことだった。海に向こうに見える島影を見ても動物はウォーレス海峡を越えなかったが、人類は越えていった。その差は人類のもつ好奇心と、道具を工夫するなどの文化的手段を併せもつことにあつたと考えられる。

狩猟採集民が移動生活を基本としたのに対し、農耕が開始されると定住生活にシフトした。しかし、地域によっては定住農耕がかなわない環境もあり、遊牧のように移動を続ける生活を選択した人びともいた。現代社会においても、巡礼の旅やのんびりした船旅など、旅をすること自体がひとつの目的でもあるような行為は、なお続けられている。新しいこと、そして何か違うものを求めて移動する行為こそ、七〇〇万年の歴史をもつホモ・モビリティスがもち続けてきた生存戦略としたら、次のステップとして、月や火星の探査、宇宙空間での滞在実験が開始されつつあるのは当然の成り行きなのかもしれない。